



くさしぎ便り No.21

プラットホームだより

くさしぎ・草の根市議と市政を考える会 2019年10月発行 e-mail kusasigi@nifty.com
ホームページは「辻よし子と歩む会」で検索してください。

「学校へ行くのは当たり前」と思っている人も多いかもしれませんが、様々な事情から学校に行けない不登校の子たちが年々増えているといわれます。今、学校の状況はどうなっているの？ その中で子どもたちはそれぞれが安心して過ごせる居場所を持っているのかしら？

子育て中の方も含め、4人の方たちにそれぞれの体験や思いを話していただき、意見交換しました。

第8回 市民のプラットホーム

2019年8月25日(日)14時～16時

中央公民館



学校 好き？

きらい？

お話 4人のみなさんから

相談できる先生と作戦を立てて

Aさん

現在22歳の息子がいます。幼稚園の時は何の問題もなく優等生だったのですが、友達と遊ぶようになってくると、あれっとな気になる場所が出てきました。いつも自分が一番でないイヤとか、友達への言葉遣いがきついや、感情の起伏が激しいとか。

私は結婚する前は教員を経験していましたし、息子が生まれたときは、いいお母さんにならなくてはいけないという気持ちも人一倍強く持っていましたので、息子が思うようにいかないと、自分

の子育てが間違っていたのではないかと、自分が否定されたような気持ちになってしまいました。

小学校に入学して、初めての夏休み明けのことです。友達が迎えに来てくれたのですが、息子はフリーズ状態になって動けなくなってしまいました。私は訳が分からずに「なぜ」「どうして」という言葉を浴びせ続けました。

息子は「学校に行きたいけど、行けない。どうしてかわからないけど、行けなくなってしまう」と言いました。私はこの「学校に行きたい」という気持ちを確認して、それなら何とか登校できるように手助けしようと、試行錯誤をはじめました。毎日学校に手をつないで送っていったのですが、学校に近づくと、息子の手が冷たくなってい

くのが分かり、「この子は言葉にできない何かを抱えているのだ」と思いました。

ずっと付き添いをするなんて、甘やかしているのではないかと思ったり、しつけがよくなかったのだらうかと考えたり、私自身も揺れました。また教員をしていたのに、わが子が不登校になるなんて、まわりの人はどう見ているだろうかとか、一番息子のことを分かっているはずなのに母親なのになど様々な思いに悩まされました。

それでも誰にも、自分が困っていると発することができず、相談もできませんでした。私たちが学校に着くころには、担任の先生は授業をされていましたので、担任にも迷惑をかけられない…と、出口の見えないトンネルを歩いているようでした。

トンネルの先に明かりが…

ところがラッキーなことに、息子が2年生の半ば頃、通っていた小学校に通級学級ができることになり、その準備に来ていた先生が、昇降口で「早く行きなさいよ」、「行けない」と押し問答をしていた私たちに声をかけてくれたのです。

私はその先生に、どうにもこうにもならなかったことを初めて話すことができました。先生は「大丈夫ですよ。作戦を立てながらやっていきましょう。うまくいかなかったら、何度でも作戦を立て直せばいい。」と言われ、それが大きな救いになりました。そうか、何度でもやり直していいんだ、失敗してもいいし、相談してもいいんだとその時分かったのです。

息子に勉強するためではなく、物理的に「学校に行く」ことを目標にさせ、先生といっしょに環境を整えていきました。

また、息子の相談者を分け、学校のことは先生に、家のことはお母さんに相談するようにさせました。将来、息子が私以外の人にも相談できるようになってもらいたいと考えたのです。

また、医療機関、地域にも共通理解をもってもらい、息子が目標をクリアしやすくし、少しでも成功体験を積み重ねられるようにしました。

息子は、無事卒業でき、今は海外で自活しています。卒業までの付添い日数は1100日にもなりましたが、その1100日を公立小学校の中で先生と対話しながら、発達にデコボコのある息子の不登校を乗り越えた体験です。

悩みを話し合える場を見つけて

Bさん

私の息子はこだわりが強く生活するうえで難しいと感じることが多々ありました。子育ては『大変』の連続だったように思います。

あるとき、彼が幼稚園の行事をきっかけに調子を崩しました。しばらく休むと元気になっていたのですが、息子は無理ができないタイプなのだと私たちも了解することになりました。

その後、小学校の登校は週1日のペースで、ほかの日は家で過ごしたり、自然観察の会に参加したり、地域の様々な場で過ごすということをしていました。また、息子に合いそうなフリースクールをみつけ、週1回通うようになりました。はじめは遠いですから、親と行っていたのですが、小学校3年生のときひとりでいくと言い出し、週3日ほど通いました。人それぞれ、その時々ペースがあると思います。

子どもが家にいると、親は長く一緒に過ごすことになり、大変になると思います。可能なら子どもと少しでも距離を置き、地域の親の会に出かけ同様の経験をした方と話をする、煮詰まって辛くなった時はケアしてもらおう、短時間でも好きなこ



とをする、そんなことも必要だと感じました。親と学校ができるのは、本人が決定できるように、ひとつひとつ積み上げていくことだと思います。

息のしやすい社会

フリースクールの姿勢、手法を、行政も取り入れようとする動きがあって、公立学校の中に、フリースクールを設置している学校もあります。それに限らず、多様な育ちがあるんだなあ、と思います。

自分たちが困っていることを共有し、伝えていくことが結果的に全体を楽にするように感じます。いろんな人がつながる場が、地域にあるといいなと思っています。

学校にはもうすこしゆとりが必要？

Cさん

二人の息子がいますが、長男は30歳、次男も22歳で、もうすっかり子育ては卒業した感じですが。長男はジェンダーを感じさせないタイプの子でしたが、今もそのような雰囲気があります。次男は大腿骨頭が壊死してしまうペルテス病を発症し、学習障害もあったのですが、幸い、ふたば学級で教えていた先生が担任となり、息子のことを理解した上で指導してくれました。

今日は、私が現在就いている学校補助員の仕事の中で感じたことをお話したいと思います。私が補助員を始めたのは2年前からです。

主にテストの丸付けなどをすると言うことで始めたのですが、実際の仕事は、クラスの授業をサポートするのが主でした。私が関わった小学校1年生のクラスは30数名のクラスでしたが、立ち歩く子や騒ぐ子が数名いて、補助員はそういう子たちを落ち着かせつつ、個別に勉強をサポートします。

しかし授業に立ち合ってみると、疑問に感じる場所が出て来ました。そのひとつは授業のやり方がそれぞれの子どもを尊重するというより、先生が一つの方向を与えて、それを全員にやらせるようになっているのではないかとということ。

たとえば絵本を読んで、〇〇を描きましょうという時、先生は黒板にお手本を示し、子どもたち全員に同じ形、色で描かせるのです。もしかしたらそれを他の色や、決められた素材ではなく、自分の選ぶ色鉛筆やクレヨンなどで描いてみたい子もいるのではないのでしょうか。

学校が個々の子どもたちを尊重するのではなく、画一的、もっと言えば全体主義的になっているのではないかと感じます。これからは疑問に思ったことを、担任とも話していけるといいなと思っています。



親が1ミリ変わると、子どもは

1メートル変わる

Dさん

あきる野に引っ越してきたのは、息子が生まれた時です。緑の多い環境で育てたいという気持ちからでした。住んでみるととても住みやすく、大好きになりました。今年、息子が小学校に入学したのを機に学校がある立川に転居しましたが、今でもあきる野は心のふるさとです。

さて、息子が通っているのは「NPO法人 東京賢治シュタイナー学校」です。私は自分が受けた教育や社会にずっと違和感を持ってきたので、子どもをどういう風に育てていこうかと割合真剣に考え「東京賢治シュタイナー学校」に入学させました。

この学校が面白そうと思えた。

感想コーナー・アンケートから

それは、この学校が面白そうと思えたためです。まずは創始者、鳥山敏子さんの言葉に非常に感銘を受けました。鳥山さんは元公立学校の先生でしたが、不登校の子どもたちと付き合う中で、大人は何ができるのかという問いを立て、実践した方です。その後、公立の教職を辞めて「賢治の学校」をスタートさせます。はじめは校舎もない運動体のようなものだったそうです。その鳥山さんが「親が1ミリ変わると、子どもは1メートル変わる」という言葉をご自身の著書に書いていて、すごい言葉だと思いました。

心の在り方や生活を親が少しでも変えるなら、それが千倍にもなって子どもにあらわれるというなら、私も自分の問題に向き合っていこうという気持ちになりました。

もうひとつ、この学校が面白そうだと思えたのは、楽しみながら活動する親の皆さんの姿に触れたからです。学校の校舎の一部を、建築の仕事をしている親が中心になって作る、学校祭などの行事に親が実行委員会を作って取り組む、子供の学びとは別に親が学ぶ機会や講座がある、広報の仕事や行政との関わりも親の役目、挙げればきりがありません。教師と親と一緒に作る学校は今も成長の過程にあります。

そういう環境のなかで育った高等部の卒業論文の発表を聞きましたが、そのレベルの高さは感動ものでした。家族的な雰囲気の中に、高度で知的なカリキュラムがある学校だと感じます。

一見遊んでいるだけのように見える低学年ですが、すべてが「学び」に関連づけられており、高学年になると複合的な学問を実践的にこなすようになります。そして、教師はいつも真剣。「この教師は絶対に折れないよ！」とは、高等部の生徒が今年の一年生の入学式で語った言葉です。私もこの学校で学びながら成長していきたいと思っています。

- 不登校の子どもたちの居場所をどう作っていくかは大きな課題だと思う。公立小学校の中に、フリースクール的なものが作れるといいなと思った。
- 元教師です。公立学校がなぜこんなに窮屈になっているのかですが、・先生方の異動が強制的になったこと。・主任、主査制度が導入されて、先生たちが平場で語り合えなくなったこと。・職員会議で決めるのではなく、今はパソコンで指示が下りてくることなどが原因だと思う。現役時代、担任したクラスに脳性麻痺の子を受け入れた。異質の子が入り、クラス全員に思いもかけない教育効果があった。
- 短い時間の中、様々な観点の話題で盛り上がり、もっとみなさんの話を聞きたかったし、話したかった。同じ時間を共有できてとてもよかったです。
- 現代社会では、学校でも家庭でもいろいろな問題があって様々な子どもたちが、それぞれに大きな問題を抱えていることを皆さんのお話から実感しました。テーマがいろいろな意味や立場を含んでいるので、また機会があれば、さらに教育についてお話しできるとよいのでは…と思いました。など

* プラットホームは市民が学び、語り合う場 *

**「学校、好き？ きれい？」、引き続き
プラットホームで取り上げます！
次回は、来年1、2月に開催予定です。
詳しくは、またチラシなどでご案内
しますので、関心のある方は、
ぜひご参加ください。**

